

浄土

十一月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 逓送 (特別送達郵便) 第三五二号
昭和四十二年十月二十五日 印 昭和四十二年十一月一日 発行

第三十三卷 第十一号

真実の怒りを見つめよう

不動明王像

伊豆菫山 願成就院 蔵



怒り、瞋り、忿り、おのれの意のままにならず、反対したりすると、人間は感情をあらわにして、めくじらたてて瞋る。激情が全身をはしれば心から怒る。その外形は不動明王となんら変わるまい。しかし、お不動さまは自分の感情の波にもてあそばされて怒るのではない。世のなかの邪悪をうちくだこうとして、ひとびとの眼をさまさせようとして、まなじりを決して怒るのである。慈悲を秘めた怒りだなどという通り一返の解釈はやめよう。すべての非人間性を根こそぎにする、激しい怒りである。決して見せかけではない。今こそ、その怒りがわれわれのうえに浴びせられていることを知るべきである。もっと真剣に考えねばなるまい。

この明王は、運慶が若かりし時、関東に下降して作った像であると近年いわれている作品である。頼朝が伊豆菫山で旗を挙げたゆかりの寺に安置されている。運慶の若々しい気魄がこもっているかのように、若々しいお不動さまでもある。怒りの顔がじつにすがすがしい。暑中の涼感というのに似ているのは、運慶が出世を望まなかつた時代の心の動きの現われであるのか。激しさのなかに静けさが不思議にもうかがえる像である。

— 目 次 —

表紙「おちば」松濤達文画

アメリカの印象—その1—

..... 峰島旭雄...(2)

四苦八苦③ 長寿の法(老)

..... 渋谷賢応...(6)

名利訪問 札幌新善光寺.....(8)

心の疏通.....(11)

お茶をおいしく⑩ 香煎とお茶漬け

..... 三浦純亭...(12)

はなしの泉 平和の使者.....(13)

和訳三部経⑨ 仏心はこれ大慈悲なり

..... 村瀬秀雄...(14)

読者の声 私達の手で念仏興隆を.....(19)

歴史夜話⑦ とかくこの世は

..... 玉山成元...(20)

浄土宗のおしえ⑨ 阿弥陀仏について

..... 金子真補...(22)

現代社会雑感

..... 渡辺 清...(25)

御歌をいただく.....(27)

母の合掌

..... 田中祥雄...(28)

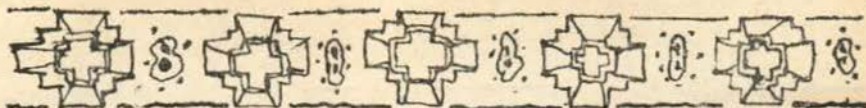
連続
絵話 みんなの法然さま・その弟子達

..... 高橋良和...(30)

阿弥陀仏と申すばかりをつとめて
浄土の莊嚴みるぞうれしき

法然上人御歌





雄 旭 島 峰

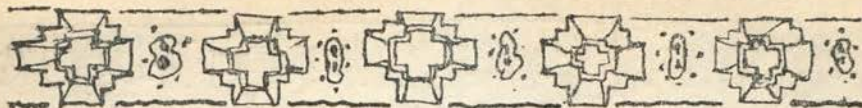
昨年九月にアメリカへわたってからほぼ一年間、ミッド・ウエスト（中西部）で暮しているあいだに、さまざまな経験をした。いま思いつくままに、そのいくつかを書きつづてみよう。

人間のことから

わたしの滞在先はメソヂスト設立のデポ大学であったが、その人たちはわたしばかりでなく、わたしの家族にたいしても、きわめて親切にしてくれた。その温い気持は人種や民族の相違をこえてこちらに伝わってくる。三ヶ月たち四ヶ月たつて、ふと気がついたことがあった。それは、いままで日本にいたときは外人を外人として見、アメリカ人をアメリカ人として見ていて、なにか腫れものにも触れるようなつきあいしかなかったのに、いまやそれがなくなり、かれらを「外人」とか「アメリカ人」とか特に意識しなくなったということである。かれらを見なれてきたという外的な理由もたしかにあるが、そのうちには、おたがいの気持の通じあいという内的な理由のあることを、見逃してはならないだろう。（あとで述べるように）デポ大学のある町グリーンキャスルに日本人（婦人）が二人しかいないことは承知していながら、道の向こうからやってくる婦人を日本人ではないかと思ってしまうような極端な場合さえあった。間近くなってようやくやはりアメリカ婦人だったことに気づくといった具合である。

教授会の雰囲気

デポ大学の教授会が月に一度、午後七時からひらかれることについては、他の機会に書いたことがあるが、定刻七時には、いつもほぼ八五パーセントから九〇パーセントの教授会メンバーが図書館内のせまい会議室にいっぱいになる。この教授会の雰囲気はまた、わたしが日本で経験してきた教授会の雰囲気とそっくりなのである。あまり重要な議題が



アメリカの印象

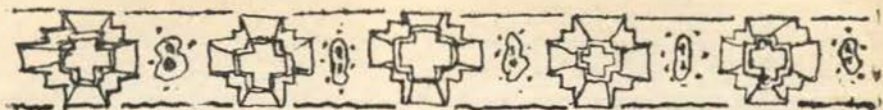
— その 1 —

〔キリスト教系大学での経験を通して〕

ないときはだいたい一時間で終わるが、大半の人たちはただなとなしに坐っているだけで、発言する人はいつもきままっているようである。議長である学長が散会をはかると、待っていましたとばかり「セカンド」(賛成)とさけんで、三々五々会議室を出て、ステューデント・ユニオンかどこかのカフェテリアでコーヒーをのみながら、おしゃべりをするのである。はじめて出席した教授会のあとで、スピーチ科のフォクセン助教授や英文科のコックス助教授にさそわれてコーヒーをのみに入った。日本の教授会とくらべてどうかときかれて、どこでも変わりはない、と答えたところ、わが意を得たりと、大いによるこんでいた。

A A U P

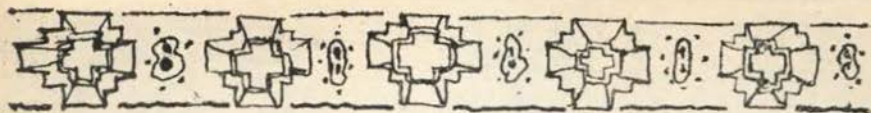
アメリカにA A U Pという組織がある。アメリカ大学教授連盟 Association of American University Professors) ともいうべき、州立・私立を問わずアメリカのすべての大学、そしてその教授たちが加盟している全国的な組織である。それぞれの大学に支部があり、年に二、三回支部会議をもよおす。事務的な協議のまえに一、二名の人を招いて講演をさせるのが慣例となっている。たまたま本年三月におこなわれたデボア大学の支部会議では、トルコから帰ったばかりの経済学のサイレンダー教授とわたしと話しをさせられることになった。サイレンダー教授はトルコのお土産話、わたしはデボアでの印象といったものを話してくれと、支部副部長をしているエクル教授からの依頼である。わたしはなにを話したらよいかという考えたすえ、いま述べたようなわたしの実感をもとにして、「人間(性)というものはどこでも変わりがなし」(Human nature is universal) という点を軸として話すことにした。さて、その会合で、サイレンダー教授のあとをうけて、デボアでのいくつかの具体的な印象を語ったあと、わたしはこうつけ加えた——かつて日本にいた



ときは、街通りでアメリカ人に会うと文字通り「アメリカ」人に見えたのに、それが、アメリカにきて半年にたったいま、ここですれちがうアメリカ人は別に「アメリカ」人として意識されず、ふつうの「人間」として感じるようになった。いやそれどころか、ながくつきあっているアメリカ「人」とは心と心の通いさえ感じる、相手の心の動きまでわかるような気がする、たとえば、わたしは、ここにご出席の皆さんがいま心のなかでなを考えているかわかるような気がする、サイレンダー教授の長時間にわたるトルコ事情のくわしい報告のあと、わたしがまたながながとデポールの印象をお話ししている、皆さんがいま心のなかで考えていることは、はやくこの講演を切り上げるべきだということである……：。皮肉まじりのこのジョークはわたしの下手な英語にもかかわらず分かったらしく、哄笑と拍手をもってわたしの話しは幕となった。

ニュートン夫妻

デポール大学でわたしのぞくした哲学宗教科には、この学科にふさわしく、教授であり同時に牧師である人たちが多かった。副主任格のエクル教授は毎日曜日欠かさずゴビン・メモリアル・チャーチのコーラスに出ているし、アイゲンブロート助教授は近くのエビスコバル・チャーチの副牧師であり、わたしといっしょに仏教のコースを教えたキング助教授も、ゴビン・チャーチのジョーンズ牧師が不在のときお葬式の主宰をしたりする。そして同じく哲学宗教科のニュートン助教授もゴビン・チャーチの顧問格で、教会附属施設のチャーター・ハウスで日曜日に子供を預かるクラスの世話をし、「ザ・メソヂスト」という日曜学校関係の雑誌のこの地区での編集にもたずさわっている。ニュートン氏はエール大学・コロンビア大学の出身で、そのほかユニオン神学校にも学んだ少壮の学者であるが、またフットボールの選手でもあり、スポーツマンらしくさばさばした気持のよい人物であ



<ニュートン助教授宅にて>

ご厄介になった。クリスマスまえに、このニュートン家にわたしたちが招かれたことがあった。食事に先き立って、ニュートン氏は、これが自分たちのやり方なので、と断って、一同に手をつながせてお祈りをした。ふしぎなことに、このときの印象が非常につよかったらしく、子供たちはあとまで、食事のときに手をつないで「頂きます」をするようになった。いま日本に帰り、男の子が増上寺の明德幼稚園で食事のまえに手をあわすことをまなできた。二才九ヶ月の娘は両方取り入れて、まず皆で手をつないで目をつぶりお祈りの形をし、つぎに一人だけ手をあわせて「ナム、ナム」をしてから食事をするのである。

る。機械いじりが好きで、かれの家の地下室にはいろいろな機械、大工道具一式、望遠鏡など、ところせましと置いてあり、チャーター・ハウスで子供たちが使う玩具の大半はニュートン氏が古板を利用してつくったものである。またカメラにくわしく、わざわざわたしに依頼して日本から部分品を取り寄せ、自分で組み立てる熱心さである。ニュートン夫人も多才な美人で、マスター・オブ・アーツをもっており、本年度第二セメスターで、サバティカル・リープ（七年に一度あたえられる一年間有給休暇）のエクセル教授のかわりに、旧約かキリスト教概論かを教えるはずである。日曜日は前記のチャーター・ハウスで子供たちの世話もしている。わたしの娘もそこでニュートン夫人の



四 苦 八 苦 — その三

長 寿 の 法 (老)

洪 谷 賢 応

人生るるや、一步また一步、一刻また一刻、死に向つて老いていくことは古今の鉄則です。牛が引かれて列をなし、ひと足、

おしき、そして絶望、これを老苦と説かれておられます。

またひと足と屠殺場に近づく如く、瞬時もゆるがせにせず、老にまた死に追いやつてまいります。「老」とは何んぞやと言うことについて、お釈迦さまは「老もうして頭

この現実の中にあつて、いかにして生きぬいていくか。それが示されなければなりません。これについて、中阿含経卷二十七、阿奴彼経第六に次のような法説がございます。要約すると以下のようなことです。

白く、齒落ち、盛壯日に衰え、身曲り、脚曲り、体重く、氣上り、杖によりて行き、肌縮み、皮ゆるみ、しわ麻子の如く、諸根毀熟して顔色醜惡なり。これを老と名づく。」と申されております。まことに適切、何んとも恐れ入る次第です。生きとし生けるもの、まぬがるべからざる不拔の法です。これより来たるなげき、むせびなき、くる

「お釈迦さまがあるとき、バツギのアヌーハと言う町においでになりました。そのときアーナンダ尊者の所に來られて「アーナンダよ、そなたと共に、アイラバティ河に往つて水浴をしよう」と申されてつれだつて行かれ、衣を岸に脱いで水浴し、浴しおわつて体をふき、さっぱりとして衣をつけられました。その時アーナンダ尊者は扇をとつてお釈迦さま

をあおいであげました。しばらくしてお釈迦さまはふり向かれ「アーナンダよ、ダイバダッタはどうにも救いようがない。私はスートラより帝王天人にいたるまで、多くの人々を見て来てはいるが、彼のような者を見たことがない。彼は全身地獄の中にはまり込んで少しもよい所がないのだ。アーナンダよ、もし彼に少しでもきれいな所があったら、私はこのようなことは言いません。アーナンダよ、人はだれでも世の中の業によつてけがれているものです。年を経れば垢もつちもります。けれども、その中に少しでもけがれない所があれば、必ず救い出すことができるものです。

アーナンダよ、もし村を離れること遠く

ない所に大きい肥いだめがあつてその中に人が落ち込んだと考えてごらん。まるきり糞の中にはまり込んだのでは手のつけようもないではないか、もしこの人にひと所、毛髪ばかりでもよい汚れない所があつたとしたら、そこをとらえて引き出すこともできるでしょう。人は皆そうなのです。どこか必ず汚れない所があるものなのです。どんなに年を経て老い、けがれた葉の中にも、どこかに必ず汚れない所があるものです。自分も、また他人も、それを見つ、それをたよりに地獄のような気持からぬけ出さなければなりません。そしてそれを見つめて生さるのです。

アーナンダよ、それは穀物の種のようなものののです。それを大切にしていれば、土に植えつけ、水をそそげばそれが芽びきます。泥中であつたその種も見事に生長します。

アーナンダよ、また火を燃すようなものです。人生年経って、老境に入れば、明の光は少く暗のみ多くなつてしまします。しかしながらその中にも、一つの善行の光明

はあるものです。老より来るなげき、むせび泣き、くるおしき、そして絶望の中にあつても、自分のもつ一つの光明の光はあるものです。その火を大切にもしつづければなりません。これを燃しつづけてゆけば、あそこの人ここの人が、また乾いた草をもつて来てそれを加えて燃し上げるでしょう。枯れ木をもつて来て燃し上げてくれるでしょう。

アーナンダよ、もし人がこの清浄の光明の火を、冷たい石の上に置きざりにしたらどうでしょう。その火はやがて炭となり、滅しおわつて冷たくなつてしまつてしまふでしょう。

アーナンダよ、けがれの中のものよりけがれなさを求め、良い種を泥中より良田にうつし、清浄の火を起こし、燃し上げ燃しつづけること、これが長寿の法と言うものののですよ。」

水浴のくつろぎから思わず口に出たダイバダッタへのすくいがかたかなしみに端を発し、思わず老苦を抜けて長寿の法にまで発展したお釈迦さまのお説法に、私は限らない親しみを感じずにはおれないのです。

若くして老いゆく人があるとともに、老いてなお若い人があると申します。年齢や肉体はまだ若いのに精神的に老いぼれてしまふ人もあり、また一方で、年齢、肉体は年をとつて来ているはずなのに精神的に若く、たくましい人があると言うことなのでしょう。そしてその後者の方は、有名無名を問わず、ある一つの仕事、それがその人の性に合った、天分とも言うべき仕事に打ち込んでいる人が多いようです。仕事は生きがいであり、それが魂の火となつて燃えつづけるのでしょう。實際生きていると言うことは自分に意義のある人生を送ると言うことであり、さもなくば生きていてもなお死するが如き生涯とも言はざるを得ないものなのではしょう。

自分の善しとする所に火をともし、そしてそれを吹き上げよ、燃えつぎるまで燃えつづけて。これが長寿の法であると受けとられるのです。



本 堂

札 幌 ——— 新 善 光 寺 ———

鉄筋の偉容

札幌市の中心街にはど近い所に、ブロック塀で囲まれた広大な敷地があり、その中に正面十間ほどの立派な鉄筋コンクリート建ての本堂がある。長野の善光寺を感じしめるような柔かい感じのする壮大なこの本堂は、北海道の中心地、札幌にふさわしい大建築物で、比較的低い街の家なみを圧している。

本堂の隣り、廊下ずたいには二階建ての庫裡があり、二階は二百畳敷きの大広間である。すべてが大造りな此の寺は、東京寺院ではみられぬのびやかさ

があり、廊下なども二間近い。いかにも北海道の寺だと感ぜしめる。

庫裡の裏は、書院である。住職の居室を兼ねた二階建てで、これ又豪壮である。

「寒い所ですから、燗房には苦勞しています」

と太田住職は、全堂スチーム燗房を自慢される。ストーブだと部屋だけの燗房になるが、これだと廊下に出ても寒くない。冬知らずというわけである。北海道は寒い所というのが知らぬ人の考えであるが、燗房設備の完備したこの地では、東京よりも暖かいということになる。

開教のメッカ

北海道開教の歴史は、それ程古くはない。

この寺も歴史は浅い。明治十七年、当時の開教師大谷玄超師がこの地を赴して、開教所を建てたのがその始まりであったという。大谷師は、猿江の重願寺も建立しているので、なかなか活躍家であったようである。

明治三十六年に木造建ての立派な本堂と庫裡が完成した。開教のメッカができたわけ

ある。

「焼けた本堂も庫裡も立派なものでした。私も知っていますが、惜しいことをしました」

太田住職はそういうながら、冥目された。惜しいことに、これは昭和二十一年の札幌の大火で焼失してしまった。今偉容を誇るこの本堂は、現住の太田隆賢師の建立になるもので昭和三十九年に完成したものである。師は四代に相当し、安富賢亮・若木賢裕師の後を継いで、焼失後、仮り堂しか無かった本寺を今の様に復興された。まさに中興開山といふ外ない。

「檀家も千七百からありますからね」

と謙遜されていたが、檀家が多いだけで寺は建つものでない。住職の大きな引導力あつての結果に外ならない。住職の大きな経営力は、後に述べる壮大な養老院や、完備した病院経営によつても実証される。

月詣り、礼拝堂

「月詣りはおかせません。これは檀家と寺をむすぶ紐帯であると共に、寺の固定収

入です」

北海道では、どの寺でも檀家の月詣りがある。関西方面でいう「速夜詣り」である。毎月檀家にお詣りするのであるが、千七百軒という檀家廻りは大変である。

「その為に常時四人の役僧と、臨時役僧二人を置いています」

これらの人々が、毎日フルに檀家を廻っているわけで、寺は檀家と密着している。開教当初の信者獲得の努力が、こうした結果を生み出したのであろうが、大変よい組織である。

「その都度のお布施ですから、東京などの棚経ほどではないですが、毎月固定的に頂ける事は強いですよ。今の寺は、すべてこれをやるべきですね。年に一度、檀家に行くか行かぬ状況では、寺は立派になりませんよ。」

寺の経営は月詣りからという事らしい。更に驚く事は、本堂の地階が礼拝堂となっていることで、その立派さは驚くばかりである。大小様々な仏壇がズラリと並び、壮観そのものである。これは仏壇というよりお墓で

ある。各檀家は共同墓地に墓を持っているが、これとは別にここに分骨して墓参りをする。雪の深い時でも、この墓にはいつでも参れるわけである。

「寺と檀家はこれでもしっかり結ばれているわけです」

案内しながら住職はそう説明された、と角、このごろは都市の墓地整理で、寺の運営に大きな支障が起っている。墓が郊外の共同墓地に集ってしまうと、寺は置き去りにされてしまうからである。ここではそうした心配が無い。すべてが合理的である。寺はますます栄えるわけである。

住職の居室に当てられている書院は昭和四十一年に完成して、本寺の偉容は完成した。

学生課長住職

太田隆賢師は、五十代の働きざかりで、油が乗き切っている。仏専・大正大学を出た交友関係も広いが、ドスのきいた言葉と共に、なみなみでない闘志が、全風貌に漂っている。

「私は何歳、負けるものかという気概を得

たのは、北大での学生課長をやっていたことですね」

師は、大阪の大通寺の二男坊であるが、大正大学時代の恩師、伊藤吉之助・高瀬承厳先生の紹介で北大の事務局に奉職し、昭和二十四・五年頃の学生運動の盛んな時に、学生課長をやっていた。

「ものすごいものでした。起きてみると屏一杯にアジビラが貼られ、数百人の学生が家を三重四重に取りまいてるんですからね」

こうした嵐の中で学長を補佐し、学生と闘って、北大を安定せしめた努力は大変なものであったらしい。その時の苦勞が、今は寺の運営や、事業の経営には、大きな力となっているらしい。

毎月二十五日の御忌の婦人会、彼岸、盆の大法要には千数百人の参詣者で広い本堂も埋まるというから、大変なものである。敷き詰められた絨氈、近代式な折りたたみ式椅子、完備した暖房と、何処を見ても、もの凄いと云った感じである。

大養老院と大病院

こうした寺の壮大さと相待って、驚かされるのが、師が理事長をしているという養老院と病院である。

千余坪の養老院は、札幌市を俯瞰する小高い丘の中腹にある。一望のもとに市を望みする景観と共に、三階建の鉄筋コンクリートは、白亜のマンションと言ってよい。総工費



養老院 附 属 病 院

一億四千万とされるこの大養老院は、将来、五百名を収容し得る日本一のものとなる。

しかし、その歴史は浅くない。已に大正十四年、新善光寺の住職、林玄松師が寺の附帯事業として設立したのに始まる。そして、これに伴う附属病院も、昭和二十三年に設立され、現在、養老院と並んで千二百坪、四階建の偉容を誇っている。一億七千万円がその建設費となっている。

「養老院に給付される費用では、とても職員員の費用はまかないきれません。年間五百万近い金は、病院の収益でまかないます」

病院の理事長でもある太田信職はそう説明された。こうした資金のやりくりが出来てこそ、この大養老院も健全な運営が出来るわけである。まさに大企業である。現在では百人余の老人が、マンション生活を楽しんでいる。先の短い人々が、こうした恵まれた施設で余生を送り得る事は、何としても有難いことである。仏教の精神が、こうした形で生かされている事は、尊い限りである。

多角的経営

新善光寺には、この外、明照幼稚園が境内にあり、百人近い園児が保育されている。更に道路沿いには、三十台の車を入れることのできる貸ガレージがあり、活動資金を生み出している。まさに火の玉の様になって、これらの企業が、住職の腕を中心として、動いて

心の疏通

過日、テレビでメキシコオリンピックの出場権をかけた、サッカージャパン第一地区予選の最終戦日本対南ベトナムの一戦を見ていた。日本はこの一戦に勝利を取ればその出場権が得られるのであるが、何かこころ一発という時に選手におちつきがない。解説者の説明によると、まだサッカーの国際大会で優勝経験のないため、精神的にゆとりがないためであり、また選抜チームであるため、練習は一緒に幾度となく繰り返してはいるが選手間

いるわけで、とても記者などの想像し得ぬエネルギーである。

いま表通りには盛んに道路工事がすすめられている。道は更によくする事であろう。北の国札帳は、北都として、更に繁栄するに違いない。この中にあって、信仰と、社会事業の

に心の疏通が欠けているためであるとしていた。試合は最小得点差の1対0で日本がオリンピックへの出場権を獲得した。

この一戦を見ても感じたことであるが先の東京オリンピック・ユニバシアード東京大会等々、日本の選手達は大きな大会には自己の力を発揮できず、前評判どころか惨敗をきしている。

このことは何もスポーツ界のみではない。日本のいかなる社会(活動体)にも共通して見られる日本人の大きな欠点の一つであると思う。これは昔から島国根性などといわれて来た民族性に由来するところである。いかなる社会においても、その成り立ちは対人関係によるのであるから、互いに持ち合わせた各自

中心道場として、この寺は益々発展するに違いない。徒らに首都に残る事を考えないで、若い宗教人は、広大なこうした天地で活躍して欲しいものである。一隅を照らすこと、それが浄土への道なのである。(安居香山)

の心、この心をかよい合わせることによってゆたかな対人関係・社会環境ができるのである。書けば大変平易なことのようにあるが、行動を伴うとなると難しい。一步現在の宗教界に目を転じて見ても一目瞭然である。近年とみに勢力を延ばしつつある各種の新興宗教、これは他の主張を全く無視した教団があると思えば、他方全く封鎖的な教団がある。一方既成教団、これは両面を持ち合せたような状態である。ここで一度まず自分の廻りより、この心の疏通を図る必要があるのではないか。それは小さな力かも知れない。しかしその力が序々に大きくなることによってお互いや社会の大きなゆたかな心が育っていくものであると思う。

お茶をおいしく

—その11—

「香煎」と「お茶漬け」

黄葉幽茗流家元

三浦純亭



「お茶漬け」

もう御存じかと思いますが、これからの夜長などに熱い玉露茶をかけていただく「玉露茶漬」は、夜食としてどなたでもよろこばれます。

御飯は昆布出しでおたき下さい。米一升にたいして二十センチほどの昆布出し汁一升と、お酒と塩少々でたき込みます。

鰻の蒲焼

手頃にきつて

塩さけ

ほごしておく

のり

もんでおく

ごましよ

七分すり

塩こんぶ

小さくきる

あられ

米つぶほどの

ところこんぶ

こまかくはさみを入れ

ておく

ひだら

やいてほごしておく

たらのこ

やいてほごしておく

くさやの干物

やいてほごしておく

大皿に色どりよく盛り、自分の好みの物を茶碗に盛った御飯の上にのせ、其の上から熱い玉露茶又は煎茶の濃い目のものをたっぷりかけて蓋をして少しむらしてから召上れ、茶

は消化をたすけ夜のお食事としても軽く召上れます。

「香煎」

香煎はお人寄せの時、御会などの折の、お待合の時に不出しする飲み物であります。ことに十一月は秋の結婚シーズンでございませうが、一般にはいまだお目出度き席にきらわれますお茶故、それに代わる飲み物として香煎をお進め致します。

らんこうせん……………らんの塩漬けを一つ器

に入れ白湯をさす。

あられこうせん……………あられとちそ（赤ちそ

ちそうせん……………の粉）を器に少々入れ

白湯をさす。

桜こうせん……………塩漬けの桜の花に白湯

をさす。

香煎のはじめは、四十七義士の一人原総衛門の一子道喜が剃髪し、了郭と名のり、この了郭なる人が山脇道三なる御殿医より、香煎が保健上著しい効果ある事を教えられ、ひさ

いだのが始まりで、現在でも京都一力茶屋の（忠臣蔵で知られている）筋向うに居を構えていられます。

現在の御当主は、了郭より十一代目と伺い、過し日京都へ参りました都度立寄り、了郭なる人の肖像画を拝見、頭の中にスケッチして参りましたのがカットの絵でございます。現在は御殿医の子孫も東京にお住いのよし、そ

— は な し の 泉 —

平和の

十月十日「体育の日」祝日法改正によつ

て新たに設けられた祭日である。国民の健全なる身体の上ということがその趣旨のとこと、同日は全国各地で記念の行事がなされたようである。また各学校の運動会もいろいろな趣好をこらして行なわれている。その会場を飾るものに万国旗がある。

日本ではじめて万国旗が作られたのは日露戦争の勝利の後と聞いている。当時の大國口

してお互いに御先祖を語り合われる日もあることと伺いました。

「蘭茶」

蘭の花をとり、湯をよくにたたせ、その中へ入れて、其のまま引きあげ、又、密の中へ入れて置き、茶を出すとき磁碗の中へ花をつ入れて出し、其の上へ茶をつげば、密にと

使者

シアを破り、一躍世界の列国の仲間入りをした日本の意気を高めるといふ意味から作られたそうであるが、今日では、そのような意味には受けとられていない。大國も小國も歴史のある國も新興の國も自由主義國も共產主義國も、全く同じ大きさに染めぬかれた旗は仲よく一本のひもに結ばれて、平和の使者の役割を図すかのように秋空になびく様は見えても大変気持のよいものである。

じられた花はたちまちひらいて、しかも香ばしゅうございます。春らんの出盛りに一度おためし下さい。楽しいものです。

「香り茶」中国では香り花を入れて高い香りを楽しみますが、ジャズミン（茉莉花）が最上です。

「ミックス茶」各産地のお茶を交ぜ合わせて味うのもまた一興です。

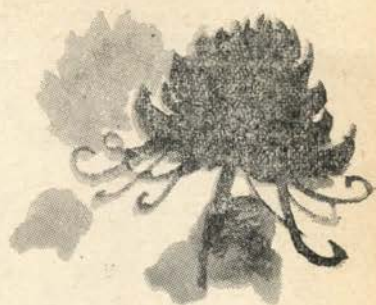
それにしても、自国の国民性・民族性を高揚せんがためか、自己の主張を通そうとするがためか、世界のどこかで絶えず争いが生じている。今日のよきな科学・文化等の発達は私達をそれらの争いに対して無関心でいられない程になつてきている。各々その主張するところに一理はあるとは思ふが、私達はあの秋空にひるがえる万国旗をもう一度再見し、その中に万国共通の精神、その民族は異なつても全く平等な立場を認め合う必要があると思ふ。このことは大変むずかしいことかも知れない。しかし努力のしがいのあることである。

和訳三部經

觀無量壽經(二)

仏心とは大慈悲これなり

村瀬 秀雄



三 空中住立の阿弥陀仏

釈尊は韋提希夫人に答えていわれた。

「汝および未来世の人々が、もし西方浄土を見たいと願うならば初めに心を統一して一所にこらし、想いを乱すことなく西方を想うのである。およそ生れつきの盲人でない限りは太陽がまさに西方に没しようとする光景を見るのである。それにはまず西に向つて坐り、姿勢を正しくし、心を落ちつけて散乱しないように統一してゆく。そのようにしながら太陽が次第に西方に没してゆき、丁度大空に皺をかけたようになった光景を見る。そして太陽が西に没した後になつても、太陽の形が目に見えるようにする。これを日想観といい初観という。

次には水想をする。これはまず水が清く澄んでいゝのを見る。そしていつも心が散乱することなく水を想うようになったならば、次に氷の相を連想する。氷は透明であるが、このことから浄土の瑠璃の大地を連想する。この大地は透明であつて金の支柱によつて支えられている。この支柱は八角であつて各面は

百宝でできていて、百宝の一つ一つに千の光明があり、一つ一つの光明は八万四千の色彩に輝いている。この輝きが大地に映つて目が眩むようである。また大地には縦横に黄金の道があり、その境界は七宝でできている。この七宝は五百色の光りを放っている。このような大地は星や月のように虚空にかかつていて、光り輝く台座となつてゐる。更にこの台座の上には百宝でできている千万の樓閣がたちならんでゐる。大地の上には四方八方から清らかな風が吹き、風が自然に樂器を奏で、その音が苦、空、無常、無我の法を説いてゐる。これを水想といい、第二観という。

このように水想から地想にと続いて想をなしたならば睡る時を除いては常に目を閉じても目に映るように努める。このようになればそれを極楽浄土の大地を見たという。これを地想観といい、第三観という。未来世の一切の大衆の中で苦から逃れようとするものが、この地想観をなせば、八十億劫の間における罪を除くことができる。かゝる浄土に往生することができ、

地想を觀じ終つたならば、次に宝樹を觀ず

る。宝樹を観ずるということは、一つ一つの樹がすべて七宝からなつて並びたつていてことを想うのである。一つ一つの樹の高さは八千由旬あり、七宝の華や葉をつけてそれぞれ光り輝いている。

これらの樹は正しく並び、葉と葉は重なり合い、葉の間には見事な花が咲き、七宝の果実をつけている。葉の大きさは縦横ともに二十五由旬あり、千色に輝き天につけた環珞のようである。華は紫金色で葉の間を縫つて輝いている。果実は大光明を放つて無数の天蓋のようである。こうした樹々の上には、それぞれに真珠の網が七重にかかつていて、網と網との間には五百億の妙華で飾られた大宮殿があり、この宮殿の中には五百億の宝珠を身につけた童子がいる。この宝珠の光りは百由旬を照し百億の太陽と月とを合せたように輝いている。宝樹を見終つたならば樹から枝、葉、花、果実と次々に明瞭になるまた観ずる。これを宝樹観といい、第四観という。

1劫は時間の単位であるが無限を意味する。百六十軒立方の城の中に芥子を満たし、三年毎に一粒の芥子を取り去つて、遂に城が

空になるまでの間を一劫という。

2由旬は長さの単位で、凡そ二百四十軒。

次には水を想う。水を想うことは極楽浄土に八つの池の水を想うことである。池

に摩尼宝珠があつて、そこから湧き出た水が十四の支流に分れ、黄金の溝の中を流れる。

この支流は七宝の色に輝き、中に六十億の蓮華が咲いている。この蓮華は七宝でできて、まるく十二由旬の大きさがあつた。その間を流れる水は、微妙な音をたて、自然に苦、空、

無常、無我、波羅蜜を説いているものあり、また諸仏を讃えているものがある。

また摩尼宝珠からは金色の光明が放たれ、光明は變じて百宝色の鳥となり、鳥の声は和やかでゆかしく仏法僧を讃歌している。これを八功德水の観または宝池観といい、第五観という。

宝地、宝樹、宝池の境界に五百億の宝樹園があつて、中には音楽を奏する無数の天人がいる。空中には楽器がかかり、自然に妙音を奏し、仏法僧を念ずべきことを説いている。この想をなし終れば宝樹、宝地、宝池を見たことであつて、これを總観又は宝楼観とい

い、第六観という。この想をなすものは無量億劫に犯した極悪の罪を除き、極楽浄土に往生することができる。

1摩尼宝珠は如意珠ともいい、衣服、財宝、飲食その他何でも随意に出す珠。

2波羅蜜は生死に迷うこの岸から涅槃の彼岸にゆくこと。

ここまで説いた釈尊は、改めて阿難尊者と章提希夫人にいった。「あきらかに聞き、あきらかに聞け。聞いたことについてよく考えよ。私はいま汝等のために、一切の苦悩を除く法を説くであろう。汝等はいく教えを心に留めて、忘れることなく、広く一切の人々に説き弘めなくてはならない」

このように釈尊が説き終ると同時に、無量寿仏は空中に留まり立つて現れ給うた。観世音、大勢至の二菩薩は脇士として左右に侍立されていた。三尊から放たれる光明は、燃えあがる火炎を見るように仰ぎ見ることができない位に光り輝いていた。無量寿仏を拝し終つた章提希夫人は、釈尊の御足をいただき礼拝してから申し上げた。

「釈尊よ、私はいま釈尊のお力によって、無量寿仏と観音勢至二菩薩を拝することができた。しかし未来の人々はこうしたならば無量寿仏と観音勢至二菩薩を拝することができるのであるか」

釈尊は答えられた。

「かの仏を見奉ろうと願う者は、次の観想をしなければならぬ。七宝の大池に蓮華が咲いている想いをする。一つの蓮華に八万四千の花びらがあり、その大きさは小さいものでも二百五十由旬ある。花びらは百宝の色に輝き、八万四千の脈があつて、その脈から八万四千の光明を放っている。花びらと花びらとの間に百億の摩尼宝珠があり、一つの宝珠から千の光明を放っている。こうした光明はあまねく地上を覆っている。

蓮華には台があつて金剛、真珠その他の宝石で飾られている。この蓮華台には四本の支柱があり、その上に幔幕がはられ、幕には五百億の宝珠で飾られている。宝珠の一つ一つから八万四千の光明が放たれ、光明の一つ一つは八万四千種類の金色に輝いている。この光明は浄土の大地を照らし、いろいろな形に

変化する。ある時は金剛台となり、ある時は真珠網となり、ある時は華のような雲となる。これを華座観といい、第七観という。

このような妙華は、もと法蔵比丘の願力のみかしめるものである。この華座観をする時は、他の観をなしてはならない。一一の葉、一一の珠、一一の光、一一の台、一一の支柱というように想う。この想をなすものは五万劫の生死の罪を滅し、必ず極樂世界に往生することができぬ。

次には仏像を想う。諸仏如来はすべての世界の人々を教化している。従つて見仏したいと願う人があるならば、仏はその人の心想の中に入り給う。もし人が仏を観想するならばその時仏を想う心の外に別の心があるわけではなく、仏が具し給うお姿のすべての特相はその人の心の上に自然に現れる。そこで仏の相を想えば、仏身は心の中に現れる。観想の心を離れて別に仏身があるわけがなく、観想の心と仏とは一体となる。これは観想が集中した境地である。諸仏は円満な智慧をもつから人々の観想に従つて現われる。こうした理由によつて、無量寿仏を観想したいと願うもの

は、まず仏の像を観想しなければならない。

それにはまず紫金色の宝像が蓮華座の上に坐しておられるのを想う。次に浄土の七宝の莊嚴、宝地、宝池、宝樹その他のものが虚空に充ち満ちていることを想う。このように観想したならば、次に仏の左辺に大蓮華があつて、その上に観世音菩薩が坐せられ、また右辺に大蓮華があつて勢至菩薩が坐せられてゐることを想う。この三尊からは金色の光明が放たれ、多くの宝樹の一つ一つの下にまた三蓮華があつて、それにみな一仏二菩薩の三尊像がある。こうして浄土には三尊のお姿によつてあまねく満たされている。この想ができたときには水流、光明、宝樹その他すべてのものが妙法を説いているのを聞くであらう。かくの如く經典に合致した想ができれば、それは概ね極樂世界を見たことになる。これを像想観といい、第八観という。この観をなすものは無量億劫の生死の罪を除き、この身このままで念仏三昧を得ることができぬ」

1 三昧は心を一所に集め動かない境地のこと。

四 仏 心 感

釈尊は阿難尊者と韋提希夫人にいわれた。

「この像想観を成し終ったならば、次に無量寿仏の身相と光明とを觀じなければならぬ。阿難よ、次のことをよく知るべきである。無量寿仏のお体は紫金色であつて、夜摩天を百千万億あわせたように光り輝いてい

る。その高さは六十万億那由他恒河沙由旬もある。眉間には白毫相があつて、右にめぐつて円く、須弥山を五つ合せた位の大きさがある。またお眼は四大海水のように広く、しかも青白に澄みわたつて少しの濁りがない。お体のすべての毛孔から須弥山のように大きな光明を放っている。

1 夜摩天は地上十六万由旬の空中にあり、そこにいる者の身長は二由旬、寿命は十四億四百万才である。

2 那由他は千億のこと。

3 恒河沙はガンジス河の砂の数程に多いというこゝで、無数のこと。

4 白毫相は白毛のかたまり、仏の特相の一つ

5 四大海水は須弥山を囲む四方の海の水。

また御頂の円光は三千大千世界を百億も合

せたように広い。この円光の中には百万億那由他恒河沙の化仏がおられ、一一の化仏には更に無数の化菩薩が侍者として随っている。

無量寿仏に八万四千の勝れた相があり、一一の相にまた八万四千の妙相が具わっている。

この一一の妙相に八万四千の光明があつて、その光明はあまねく十方世界を照らして、念の衆生を摂取して捨て給ふなし。こうして仏の光明、相好、化仏のことはとうてい詳しく説きつくし得ない。ただ觀想し憶念して心眼を開き、あきらかに見られるように努めるべきである。

1 円光は後光のこと。

2 三千大千世界は、大千世界の三千倍。六千

世界は中千世界の千倍、中千世界は小千世界の千倍、小千世界はこの世界の千倍のこゝで、結局大宇宙の意味する。

3 化仏は人々の器に應じて、それに適するよう

に形を変えて現われる仏のこと。

4 この一句を撰益文という。阿弥陀仏の光明は無量無辺で、十方世界を照らしているがこの光明に浴する者は念仏を称えるものに

限られている。このことを法然上人は

「觀無量寿経にいはく、一一光明遍照、十方世界、念仏衆生、摂取不捨。これは弥陀の光明ただ念仏の衆生をてらして、余の一切の行人をば照さずといふ也」大胡の太郎実秀が妻室のもとへつかはす御返事

といわれている。それならば余行の者には光明が照さないわけは何んであるか。その理由について法然上人は二つの理由をあげている。即ち

「解するに二義あり。一には親縁等の三義、文のごとし。二には本願の義、いわく余行は本願にあらず。故にこれを照摂せず。念仏はこれ本願なり。故にこれを照摂す。故に善導和尚の六時礼讃にいわく、弥陀の身色は金山の如し。相好の光明は十方を照らす。ただ念仏のみありて光摂か蒙る。まさ

に知るべし。本願最も強しとす」(選択本願念仏集)

といわれている。ここに「親縁等の三義、文のごとし」というのは善導大師の文のこゝで、法然上人は同文を引用して。

「これに三義あり。一に親縁を明す。衆生、

行を起して口常に仏を称すれば、仏即ちこれを聞きたまう。身常に仏を礼敬すれば、

仏即ちこれを見たまう。心常に仏を念すれば、仏即ちこれを知りたまう。衆生仏を憶念すれば、仏また衆生を憶念したまう。彼の此の三業あい捨離せず。故に親縁と名づく。二に近縁を明す。衆生仏を見奉らんと願すれば、仏即ち念に應じて目前に現在したまう。故に近縁と名づく。三に増上縁を明す。衆生称念すれば、即ち多劫の罪を除く。命終らんと欲する時、仏聖衆とともに自ら来りて近接したまう。諸邪業繫、よく礙うる者なし。故に増上縁と名づく。自余の衆行も、これ善と名づくとも雖も、もし念仏に比すれば全く比較にあらず(選択本願念仏集)

といわれている。更にこの光明はお念仏を止めた者には照らさなくなる。即ち法然上人は、一度光明に浴すれば生涯光明に照らされているのかという問いに對して

「念仏のゆへにこそてらすひかりの、念仏退転してのちは、なにものをたよりにたてらすべきぞ。さようにあるならば、念仏一

遍申さぬものやはある」(東大寺十問答)ときつ注意を与えられた。

このように仏の好相を見奉った者は、十方の一切の諸仏を見たことになる。諸仏を見奉るのであるから、この觀を念仏三昧と名づける。またこの觀をなすことを一切の仏身を觀する法と名づける。仏身を觀するのであるから、また念を窺うことができる。信心とは大慈悲心のことである。仏は縁なくして起す大慈悲心をもつて一切の人々を救い給う。

1 法然上人はこの句を引用されて次のようにいわれている。

「阿弥陀ほとけの御ちかひには有智無智をもえらばず。持戒破戒をもきはらず。仏前仏後の衆生をもえらばず。在家出家の人をもきはらず。念仏往生の誓願は、平等の慈悲に任してをこしたまひたる事にて候へば、

人をきらふ事はまたまた候はぬなり。されば觀無量壽經には、信心とは大慈悲これなりととされて候也」(津戸三郎へつかはす御返事)

この觀法をなす者は、他の世界で命を終つても何れは淨土に往生し、諸仏の前に生れ無

1 生忍を得るであらう。こうしたわけで智慧のある者は想いをこらし、明かに無量壽仏を觀すべきである。無量壽仏を觀じようとするには、まず一つの相好から觀じ始めるべきで、

初めに眉間の白毫を觀想して明了ならしめる。眉間の白毫を見奉ったものは、仏の八万四千の相好が自然に現われるであらう。無量壽仏を見奉ったものは、これ即ち十方世界の無量諸仏を見奉ったことになる。無量の諸仏を見奉ることができるので、諸仏の前において来世は必ず往生し成仏することができる。証をたてて下さるであらう。これをあまねく諸仏の肉身を觀する法とし、第九の觀と名づける。この觀想を名づけて正觀といい、もし他の觀想をするならば、それを邪觀という。

1 無生忍は不生不滅の法の境地に安住している位のこと。

2 法然上人は第九觀の利害について

「第九の真身觀は、これ觀念三昧の法なり。

行もし成就せば、即ち弥陀の身を見奉る。弥陀を見奉るが故に諸仏を見ることを得。諸仏を見るが故に現前授記(諸仏の前で成仏の証を与える)せらる。」といわれる。

私達の手で念仏興隆を

十月十四日、私は団参で鎌倉光明寺の十夜法要におまいりする機会を得ました。当日は海岸から吹きよせる強風につて時々雨が降るあいにくの天候でございました。今日の唱導師として私の檀那寺と同じ港南組の三仏寺住職吉川哲雄上人が勤められましたので、団参を募り参拝したのです。

私は毎年光明寺のお十夜にはかかさずおまいりしておりますが、今年ほど感激というかありがたいと思つたことはございませんでした。と申しますのは悪天候にもかかわらず例年になくおまいりの方々が大勢見え本堂を埋め尽し、また随喜の寺院方も内陣に入りきれぬほどでございました。法要のあとの授与十念の時などはあの大きな本堂が本当に極楽の

園を思わせるような莊嚴な雰囲氣に一瞬身体の中に生きているありがたさがこみあげてまいりました。

私が毎年おまいりするたのしみの一つに

あの古式豊かな引声念仏の唱法がございまして。聞くところによりますと、この唱法は光明寺のみに残るものと、あの菌切れのよいしかも流暢な節回しを聞いておりますとすべてのことを忘れさせられるからです。私は法要の方法には全く知識がございませんが、この唱法も現在では一部の方だけができるとのこと、何とか若い方にも伝えていただきたいと思ひながら手を合わせるのでした。

〇—◇—〇—

私の住む町は数年前までは農家が多く、何事でも協力し合うのどかな、のんびりとした生活でございました。しかしこの数年宅地造成のブームにつて、山は切り開かれ、田は埋められ見る見る間に近代的な家屋が建てられ、一変して今までのゆるやかな流れから、

急流の中にほうり込まれたような生活状態となつてまいりました。町内の会合などでも今までのようにはいかず、進歩的な意見に押されがちです。激しい流れの中に生きている若い方々の意味にも一理はございます。しかし彼等の心にはまったく余裕が感じられませんか。いつの世にも穩健と進歩との間に摩擦がありますのは常ですが、今日の若い方には同調できぬところが多々ございます。終戦当時から見ると驚く程の進歩、平和な日々が続いておりますが、若い方々はその平和の中に各自の若さをぶつける対象をはきちがえているように思えてならないのです。私はおまいりをしてる間、種々考えておりましたが、若い方の心に余裕を与えることのできるのはお念仏以外にないと思ひました。今はやりの新興宗教も結構でしょう。しかしそれはあまりにも排他的な思想が充ちております。人は一人では力の弱いものです。皆が協力し合うところに大きな無限の力がひそんでいるのです。私はこれを教えるのはありがたい利他の念仏以外にないと思ひ、他に分ち与えたいような氣持で光明寺をあよにしたのです。



とかくこの世は

元成山玉

秋彼岸の三日目、檀家のA氏は困り果てた顔でやってきた。彼はいつものように花と線香をあつらえて墓参をすませた後、人の気配をうかがって再度寺に寄り、墓地を改葬したい旨を告げた。

A氏の話によると、奥さんは創価学会の信者で、ここ数年ろくな仕事もせず、家を空けて折伏生活が続けているため、家庭内いざこざが絶えなかった。そのため再三離婚話が持ち上ったが、幼な子のためを思ってA氏は我慢してきた。ところが頼みの子供もいつか創価学会に入り、親子で主人の折伏をするようになった。けれども氏Aはがんとし執拗な折伏をはねのけ今日に至ったという。そんな状態であるから妻子の墓参は全くない。一人寂しくA氏は墓参を続けた。ところが精神が異常になつてゐる妻は、夫が入信しないのは菩提寺に墓があるからと思つたのであらうか、A氏の墓参を何とかしてくいといめようと考えた。彼女は墓地の改葬を強要し、一旦池袋にある常在寺に預け、やがて大石寺の墓地に移すことを進めた。しかし経済的にも容易

でないA氏は取りあわずに隠れて墓参していた。ところが彼女はすぐとそれを感じし、一週間も十日も口をきかずに泣きわめく。殴ろうと蹴ろうと全ききまがない。盆や正月や彼岸のたびにこの始末では世間体も悪い。自分は何としても先祖の墓地を改葬したくないが、どうにも方法がない。もう腹をきめましたとさめざめとなき、創価学会の生々しい現実をことこまかに訴えていた。

最初は人の気配をうかがつていたA氏も、だんだんと威を落ちつけ、次々と来る檀信徒とともに心ゆくまで学会の批判をしたためた気が晴れたらしい。しかしA氏自身は学会員ではないので私もその扱いに困つた。結局二日後保健所員の立ち合いのもと骨壺は掘り出された。A氏は何やら目を赤らめてブツブツいいながら冷い水で壺を洗い終ると、しっかりとどきかえ、何回もふり返りながら寺を後にした。

『岩淵夜話』によると、三河譜代の衆に石川又四郎というものがあつた。彼は元来浄土宗であつたのが改宗して一向宗、今日の真宗

になった。ちょうどそのころ三河に向一揆が起り、又四郎はこの一揆に一味して家康に敵対した。やがて一揆は家康に敵することができなくなり不本意の和談ということになった。又四郎は三河を立ち去って所々方々を浪人して回ったが、再び岡島に帰ってきた。そしてある日、家康が鷹野に出たとき、その路傍にうずくまっていた。家康はこれをみて、あれにいるのは石川又四郎めだが、譜代の主を旦那坊主に思い替えて自分のところを出奔し、ここかしことうろつきまわり、思わしいこともないのでまた舞い戻って来たらしい。不届きな奴だ、といって通りかかったけれど、何を思ったか又四郎めに供をさせよといった。

近習がこの家康の命を又四郎に伝えると、又四郎はありがたいとばかりに徒士の間にまじって終日家康の供をした。夕暮になり又四郎と呼ばれたので家康の前に出た。すると家康は不意に又四郎の胸ぐらをとらえて、貴様はもとの浄土宗にならぬか、いやならいやといえ、首を切るぞといった。ところが又四郎

は、たとえ首を切られても宗旨を替えることはできないと答えた。家康はさてさてにくい奴めだ、赦すぞとばかりいつて又四郎を突き放した。そのため又四郎は後ろざまに二、三間よろよろとよろけてあおむけに倒れたが、やがて起き上って両手をつき、私はもとの浄土宗に改宗するといった。

そこで家康は、お前は自分が宗旨を替えよといったときは替えないといい、赦すといったらまた替えるというのはなぜかと問うた。すると又四郎は、自分のようなものでも宗旨を替えなければ成敗するといわれて宗旨を替えたところでは男が立たない。それでいやだといった。しかし今度は赦すといわれたからには何も主人の嫌いな宗旨でいる必要もないから、もとの浄土宗になろうといったのだ、と答えた。そこで家康は快く笑ってしまつたが、後になって又四郎がいうことに、自分は太抵の者に突き候されるようなことはない。しかし殿の腕先にかかつてはたまつたものではない、といった。

いつの時代でも転宗転派のためにいざこざ

が起るケースは多い。しかしそれらの多くは教義や信仰に関するものは極めて少なく、政治的あるいは経済的な問題を含んでいる。第二次大戦後、数多くの新興宗教ができ、仏教に対する批判もかなりでてきた。彼らは仏教が葬式のためのものでしかないといつてののしる。それはそれでよい。けれども通夜や葬式のととき涙ながらにお経をきく現実の姿を忘れてはならない。宗教は理論で片づけられるものではない。たとえ鯛の頭でも、それが大きい価値を持つ場合もありうる。

A氏が寺を去るとき私は次のようにいつてやった。たとえこの墓地に骨はなくなつても私は回向を続けます。安心しなさい。困つたことがあればいつでもお寺に来なさいと。するとA氏は、何分長い目でみてもらいたい、そのうちきつと、といい、後は言葉にならず一層深く頭を下げ、肩を落して立ち去つた。何とも可愛想でしばらく落ちつかない。しかし最後の言葉は、悩める衆生済度もできないと悲観していた私に、せめてもの慰めの言葉であった。

「浄土宗のおしえ」の項目も色々尊く説かれ、今月来月号を以て終りとするとのこと
で、私はその御本尊「阿弥陀仏」と、そのお
国「極楽浄土」について少しく述べさしてい
ただきましよう。

阿弥陀仏の理解も本来は色々あつて各時代
各祖師方によつて非常に違います。併し、今
は正しく浄土宗祖法然上人によつて拝まれた
阿弥陀仏、従つて浄土宗の信仰に生きる私と
しての阿弥陀仏観の一端を申しましよう。

元来、広大な阿弥陀仏のこと論議など出来
るものではありません。どこまでも、ころ拝
がましていただいていますという程のことで
あります。

宗祖は「浄土の三部経」により五劫思惟・
十劫正覚・応声即現の阿弥陀仏と拝まれたと
拝察いたします。即ち、阿弥陀仏は三部経に
よりますと、その昔、我等罪惡生死に悩む凡
夫を如何にしたら救われようか、と五劫が長
い間、その救いの手段方法を苦慮せられ衆生
済度の大願四十八通を立てられ、その願行成
就の為にあらゆる艱難辛苦遊ばされ、今より
十劫の昔、めでたく本願成就し救いのみ手を

浄土宗のおしえ <9>

阿弥陀仏について

金子真補



垂れさせ給う仏・阿弥陀仏となりなされ、そ
して一切衆生を助ける為には外ではない、只
「南無阿弥陀仏」と「我が名」を呼べ、さす
ればその声頼りに現われて救いのみ手に抱く
であらう。という仏となり給うたと信仰され
たと思います。

今、その宗祖の思召しをいただく為に一二
の御言葉を見れば

酬因感果のことはりを大慈大悲の御心のう
ちに思惟して五劫にをよべり、われ別願を
もて浄土に居して薄地底下の衆生を引導す
べし我須らく衆生のために永劫の修行をを
くり万善万行の果徳円満し、その成就せん
ところの万徳無漏の一切の功德をもて、わ
が名号として衆生にとなへしめん、衆生信
をいたして称念せば、わが願にこたへてむ
まるることを得べし（登山状）
と、あることによつてよく知られるのであ
る。

或は（大胡太郎実秀が妻室への御返事）によれば、
阿弥陀仏はとけ、いまだほとけになり給はざ
りしむかし法蔵菩薩と申ししいにしへ、ほ
とけの国土をきよめ衆生を成就せむがため

に世自在王如来と申し、ほとけの御まへにして四十八の大願ををこし給ひしその中に、一切衆生往生のために一つの願をおこし給へる、これを念仏往生の本願と申す也、すなわち「無量寿経」に「もしわれ仏を得たらんに十方の衆生、至心に信樂して我が国に生れんと欲して乃至十念せんに、もし生れずば正覺を取らじ」と、あるのでも知り得られる。而も阿弥陀仏は生き生きとして声に應じて現われ給うとしては、

生身の仏、此本尊に入り給へば、本尊の御眼に見へ奉るは、頓て生身の御眼にみへ奉ると思ふべし、本尊の御耳に申す事聞かれ奉るは、やがて生身の御耳にきかれ奉ると思ふべし、かやうに思へば、本尊に向ひ奉る功德目出度き事也（諸人勸化の御詞）ともあり、又、和語灯録「示戒人詞」に

阿弥陀仏すでに本願を成就し、極樂世界を莊嚴したてて、御目をみめぐらして、わが名をとふる人やあると御らんじ、御みみをかたぶけて、わが名を称する者やあるとよるひるきこしめさるるなり、されば一称

も一念も阿弥陀仏にしろれまいらせずといふことなし

と言われている如く、今現に生き生きとして見え奉るみ仏と拝まれたと拝察する。

まして、宗祖の常々信仰の対象となつた、「念持仏」「愛弟子源智上人に形見として与えられた仏」を拝見すれば、「立撮即行」立つてそのままお救いに出てくださるという立像の阿弥陀仏であつた因縁などから考えても宗祖の正しく拝まれた仏は、常と呼ばば答えんとする仏、来迎引接想に住する仏なることもよく分るのであり、さればこそ行住坐臥に恋慕された阿弥陀仏であつたことを知るのであります。

それ故、その流れを汲む私達も、当然、以上のような阿弥陀仏を拝み奉るべきであります。

擬、今日の時点に立つて考える時、以上の如き、阿弥陀仏を信じられるかということである。

併し、この点につき、私は思う、私共の今現にあるのも、父母の因縁と過去世に於ける積み重ねられた因縁により生れ出でたもので

あり、又生れ出でよりの生活も私達の心行の因縁により次から次への結果としての存在である。而して私等の原因因縁は何れも妄執の中の業であるから生死輪廻の生活の繰返しとなり、今現に苦の娑婆世界の存在として日々の生活を展開している。

今、阿弥陀仏の存在を考える時、法蔵菩薩因位の発願修行は、今いう私達のような妄執の発願ではなく、実に尊い無漏清淨真実の誓願であり、又修業行為でもあつた。されば人間の如き存在ではない、宗祖のいわゆる酬因感果の化身、即ち、「報身」であるはずである。

報身とは万行の因に報うて感得する所の身なり……凡そ万行の因に酬うて万徳の果を感ずること、因によつて果を感ずる、華の果を結ぶがごとく、業に酬うて報を招く、響の聲に應ずるに似たり、これすなはち法蔵比丘実修の万行に酬うて、阿陀如来実証の万徳を得たまえる報身如来なり（大經釈）即ち、極樂の阿弥陀仏は「報身」であるためにいとも尊き御身、御姿でい給うのでありそれが為に私達には直に見奉ることは出来

ぬ。併し、それは決して居られないのではない、世には見える、分るということも色々の手段方法を以てして始めて出来ることである。まして宗教の世界である。単に阿弥陀仏をこの眼で見上げることによって見奉ることは出来ぬ。阿弥陀仏がないから見えぬのではなくして、阿弥陀仏の存在は云って見れば尊い存在なるが故に私達の不束な目では見奉ることは出来ぬので、私達の眼識がそのような尊い物を直に見ることが出来ぬのであって、譬えば、親の光は七光とよく云われるが、親の有難さが分からぬうちは、その尊い七光をどうしても見る事が出来ぬと同様である。

併し阿弥陀仏の方ではその本願により念仏の声する処へはいつも来り給うているのである、御法語に（選択集）

衆生仏を見んと願すれば、仏すなはち念に応じ目前に現在す、故に近縁と名づく
とあります。

さればこそ私等が法要の時に必ず「三奉請」「四奉請」の文「奉請弥陀世尊入道場」と称え、阿弥陀如来のお出ましを願ひ、最後には送仏の偈「請仏隨緣還本国、普散香華心送仏」

と唱えてお帰りを願うて法要を営んでいるのも、皆よし目には見えなくてもみ仏がましきことを信じてしているのでありましょう。

或は本当に念仏を称え三昧発得するならば心眼を開くことを得て、ありありと見仏も出来るのであります。それが証拠には浄土代々の祖師方は何れもその立場に立たれていゝ。宗祖は

われはただとけにいつかあふひぐさ

ころのつまにかけぬ日ぞなき

阿弥陀仏と申すばかりをつとめて

浄土の莊嚴見るぞうれしき

と、喜ばれて居られます。

それ故、単なる議論によって阿弥陀仏の存在を証明せんとすることは無理であり、むしろ誤りで、物事の証明には、その事物により証明の方法があり夫々異つた方法です。要は、阿弥陀仏の存在を知ることには單なる議論でなく、本当の念仏、阿弥陀仏の御本願の真意に直参し心からなる念仏をすることによってこそ了解せられねばならぬことと想うのであります。

阿弥陀仏は、宗祖大師が云われているよう

に、その生身この御本尊に入り給うと信じ仰ぎ、よくおつかえする処、單なる木仏金仏でなくなり、尊く拝まれて来るし、遂には、それらのお像はなくても念仏する時、自分一人ではない二人なること、ここに如来ましますと信仰されるようになり、いつも如来と共に生活する境地、安心立命、宗祖の所謂

いけば念仏の功つもあり、しなば浄土へまゐりなん、とてもかくても此身には、思ひわづらふ事ぞなきと思ひぬれば、死生共にわづらひなし（宗に仰せられける御詞）

の尊い立場となり得て念仏のややともすると暗い縁起の悪いなどということの如何に誤った考へであるか、むしろ、その愚かさ、情けなき、今日のそういう人の無信仰さ、單に理智に生きて還愚の尊さを知らざる思い上りであつて、さては、念仏宗徒の念仏、弥陀の真意を説かざる無責任さに慨嘆を禁じ得ず、相すまないと懺悔の念にくれる者であります。

今日、三昧発得者の観見した三昧仏が尊くも残されている、三昧発得者必ずしも画家ではありません。御自身の観見の仏を完全に表現し尽したとは考えられない。併し、たとえ

不完全なりとも表現し得たそのお姿のあるかぎり、そのような阿弥陀仏があることを知るべきで、三昧を単に錯覚なり、誤りなりなどとは云い切るべきではない、自分に出来ないのをよしとして千中一二の尊い立場のことを否定して失うことは、むしろつつしむべきことではなからうか。

むしろ、私としては平生には不見の機、阿弥陀仏もありありと拝み得ざる愚か者であることを恥じ、併し、この不束者も捨て給はず

念仏衆生撰取不捨なる仏、而も最後臨終の夕には、仏の方から来迎引接し給い、その時こそ見仏聞法、安詳として生死解脱さして下さる阿弥陀仏、如来なることを信じ、宗祖の御法語に、

阿弥陀仏の本願と申すことは様もなく、我が心を澄ませとにもあらず、不浄の身を浄めよとにもあらず、ただねてもさめても、ひとすじに御名を唱うる人をば、臨終には必ず来りて迎え給う（念仏往生要義抄）

《現代の社会雑感》

渡 辺 清

最近、社会問題としてクローズ・アップされ、新聞紙上に度々取り上げられているものに、**「原宿族」**、**「原理研究会」**、**「全学連」**の三つがある。全学連のことは、何も最近に始まったことではないが、一昨日（十月八日）の羽田での佐藤首相の南ベトナム訪問反対デモでの学生デモ隊の暴挙に対しては、翌日朝

刊各紙で徹底的な批判がなされ、改めて全学連というものの評価がなされた観がある。また、原宿族については、夏の間はその騒音等がかなり問題となったが、秋の訪れとともに、幾分下火となったようである。そして、その原宿族にかわり、原理研究会というものが問題視されてきている。

第十九願によりて臨終の時にいたれば、仏来迎したもう、行者これを見て、心に歡喜をなして禪定に入るがごとくして、たちまちに観音の蓮台に乗りて安養の宝刹に至るなり（三部経大意）

とありますことを素直にいただいて念仏生活を続けて居る者であります。

私は、阿弥陀仏とは、実に以上の如きみ仏なりと信じ仰ぎます。

この原理研究会というのは、あえて申すまでもないが、韓国人の文鮮明という人が創めたもので、人間の本质とか、宇宙の真理、社会の原理等を研究するものであるという。こうした研究会は、早稲田大学等多くの大学にサークルとして存在している。

しかしながら、私の大学には、そうしたサークルはまだ生れていない。もちろん、個人的はその運動に参加している学生もいるかもしれないが、学内においては、表面的な活動は何ら行なわれていない。これは、私の大学が仏教大学という特殊性をもっていることによるのでもあろうが、その他にも原因がある

ように思う。それは、マス・プロ教育ということである。私の大学は、学生数僅か一千名程であるが、例えば、早大の場合は数万人という学生がいる。そうした大学では、教授と学生との触れ合いは望むべくもない。学生は講義を聞いて帰るだけである。その講義にしても、何百人もの学生が大教室に集められて、マイクを使用してのものである。こうした講義から一体何が得られるだろうか。單なる知識の吸収だけが目的なら、それでもよいだろう。しかし、それでは、学問の真髄は究められないであろう。私は、真の大学教育の意義は、教授との人間的な触れ合いにあると思う。ところが、おおくの大学では、それが行なわれていない。

そうしたマス・プロ大学に原理運動というのに根ざしているようだ。人間不在のマス・プロ教育をうけている者が、"人間とはどういうものか"といった、ごく素朴な、かつ重大な疑問を感じるのには、極めて当然な現象であるといえよう。このような不安な、悩みを抱いた大学生にとっては、原理研究会という

ものは、自分の悩みを一挙に解決してくれるように思われよう。それは、一般社会人が、新興宗教に殺到するのと同様といえる。

私は、良くいわれるような、新興宗教の興隆の原因を、既成仏教の腐敗や墮落によるものだと考えてはいない。新興宗教は、現代の社会に満足できない者の集まりであると思う。社会の機構が複雑になれば、それだけ悩みをもつ者も多くなる。そして、又人間は目先の利益を追求する。従って、現世利益というものを強烈に表面に押し出せば、現代の社会では、はやることうけ合いである。その良い例が、成田の不動尊であり、川崎大師であり、浅草の観音である。こうした所にくる人の多くは、家内安全、交通安全等を祈る。"金がもうかるように"と祈って帰る者も少なくあるまい。こうした現代人の弱点を利用して、前述の寺院は金もうけ主義に走っている。特に成田の場合など、そうした傾向が著しい。(成田は現在、新本堂を三十数億という奉算で建築中である。金があるから良いのではないか、といっても、寺院としては、もっ

と他に使い道があるのではないか、という気がする。)新興宗教の多くが同様である。原理研究会がそうである。現代の自己を見失いそうな社会の中で、何かよりどころを求めようとした結果である。

ところで、冒頭に述べた、原宿族といわれる青少年や、全学連の学生にも、これと同様なことがいえるように思う。即ち、現代の社会に満足できない青年の一部は、その欲求不満を解消するために、原理運動に走る。また或る学生は、それを遊びに求め、原宿族となる。また、他の学生は、それを学生運動に求める。

そうした者を救うのは、宗教以外にはないのではないか。特に、既成仏教が現代において果さねばならない任務ではないかと思う。現代に生きる青少年に信仰をもてといっても、不可能に近い。現に、仏教大学に学ぶ私でも信仰とはどういうものかと聞かれても、即答できぬ、はずかしい状態である。このような青年達を、是非とも既成仏教は救ってほしいのである。

お歌をいたたく

阿弥陀仏と申すばかりをつとめてて

浄土の莊嚴みるぞうれしき

(勅修御伝第三十)

莊嚴（しょうごん）は美しく飾って嚴かな
ことで、仏前を飾ることをいい、また嚴かな
極楽浄土の有様のことを行います。そこでお
歌の意味は

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏とお念仏を称
えることだけを勤めとしていて、極楽浄土の
おごそかな有様を見ることができるのは、ま
ことに嬉しいことである。

ということになります。このお歌は元久二
年の御作とありますので、上人七十三才の時
にお詠みになったものです。この頃は上人に
対する圧迫が劇しくなった時で、叡山からは
専修念仏を停止せしめよという決議文が出て
いました。また一方南都の興福寺からは念仏
を禁止せしめよという訴状が提出されていま
した。このように上人を中心として仏教界が

騒然とし、今にも念仏停止の命令が発せられ
るかも知れない時に、上人は素直に自分の氣
持を詠まれたものです。お歌の意味が簡單明
瞭であるだけに、それだけかえって確固たる
御信念の程がうかがわれもし、上人の御心情
が察せられると思います。

さて、極楽の莊嚴については經典に華麗極
まる描写がなされています。宝珠の光明が大
地を照し「億千の日の如くにして具に見るべ
からず」といい、宝樹にかかる網の輝きは、
「猶し百億の日月の和合せるが如し」といい、
これは無限に通ずる言葉でありましょう。ま
た「無量寿仏に八万四千の相あり。一一の相
に各八万四千の随形好あり。一一の好にまた
八万四千の光明あり」といい、これを計算す
ると五八八兆となります。しかし人工衛星の
飛び交う時代となつて、大きな数字に慣れて
珍しいものでなくなりました。しかしそれも
「一一の光明あまねく十方の世界を照す」と
説いて、有限のものが一挙に無限に飛躍しま
す。こうした描写には無限という数量をいか
にして感覚の上で体得させるかを苦心してい
るように思われます。

また那由他恒河沙という数量は無限という
意味であります。しかしこの数量の上に六十
万億とか百万億とかの数をつけていますが、
無限を何倍しても矢張り無限であります。例
えば「彼の仏の円光は百億三千大世界の如
し。円光の中に百万億那由他恒河沙の化仏あ
り。一一の化仏に亦衆多無數の化菩薩ありて
以て侍者となす」といい、「無限」をこのよ
うに表現して感覚に訴えようとする方法は仏
教独特のものであります。

像観に「一一の樹下にまた三蓮華あり。
諸の蓮華の上に各一仏二菩薩の像ありて、彼
の図に偏満す」と浄土には三尊の像で充ち満
ちていることを説き、更に最後の雜想観には
「阿弥陀仏は神通如意にして十方の図におい
て変現したまふこと自在なり。或いは大身を
現じ虚空の中に満ち、或いは小身を現じ丈六
（五米）八尺（二米余）となり、現われる所
の形はみな真金色なり」と説いています。ま
た「汝等心に仏を想うとき、この心即ちこれ
三十二相八十随形好なる。この心仏をつく
る。この心これ仏なり」として宇宙に遍満す
る阿弥陀仏は、お寺の本堂に安置される木像
ともなり給うのであります。（M）

母の合掌

田中祥雄



暑さ寒さも彼岸までと昔しの人はいまいことを云ったものである。今年も秋雨前線は寒さと呼んでいるかの様に、つめたい雨が落葉をたたきつけている。私が中学一年の春の彼岸の中日に、父は脳溢血の再発で死んだ。病氣になってから五十六日目であった。母や親類や法類の人々や信徒の人々の手で葬式は行なわれ、私も黒衣を着せられて祭壇に向って座わり、式の間合掌させられた。父の死んだ時を今考えてみると足が痛い、手を合せるのが苦痛だったことしか覚えていない。

大正大学に学んで今年で七年目になる。上京して深川の雲光院に世話になって通学しているのである。帰省するのは、年に何回もなく、正月とお盆くらいである。あれはいつの春休みであったか、たしか大学二年生の終りのことだったと思う。岡崎まで電車であとはバスで四〇分程して九久平で降りかえて仁王まで。バス停から自坊まで俗に安全寺坂というかなり急勾配の坂がうねりうねって三百米程ある。自坊の安全寺になぞらえてつけられた坂の名前で、それを登ってくると自坊の辺

で誰れでも「やれやれ」とか「もの少しだ」と云って門前で休んで行くのである。腰掛がないというのでいつごろか知らないが門前の花畑とビンカの垣根の間に庫裡の新築の時残った石を三つ並べたのである。安全寺坂を登る人はその石で休んで行くのである。

あの時の帰省の用事は新学期の授業料を取りに帰ったと覚えていた。二日して上京しなくてははいけなかったのも、身辺のことや学校のことを話して三日目の朝一番のバスに思いい、いそいで本堂に行きお参りをして、その安全寺坂をバス停へと下ったのである。一番のバスは六時三十分である。二月下旬であるから朝六時といえば、まだまだである。門前まで母は送って出てくれた。「元気でな」とその時は云った。坂の下りは早いものである。まるで爪先で歩くようなもので、足のついた点から足のすべりが止まる点まで一寸五分程あるのである。ちょうどバス停への半分程のところ母の方をふり返えった。すると母はあの石に腰掛けて私の方を見ていた。又十間程行ってふり返って見た。朝もやではっきりわからないが手を合せている様に見えた。し

かも首をうなだれてである。バスの時間があ
る。早く行かなければと思いつつも又目をや
った。たしかに手を合せている、まちがいな
い。何にかさつき食べた御飯がつかえる様に
胸がじーんとして、思わずオーバーの襟を立
てた。もう四回目は何ぜかふり返ることが出
来なかった。うなだれて合掌し、たぶん口に
は念仏を称えていることだろう。あの石に座
って。私はたまりかねて小走りに走った。バ
スが来るのと、私がバス停につくのと大差が
なかったのである。バスの後座に乗り、自坊
の方は見えないかと窓ガラスをすかして見た
が自分の吐く息ではっきり見えない。そのう
ちに目が涙でボーッとしてみえなくなつてし
まった。上京中の車中で私は、自分の右手と
左手としっかり合せて、それを斜めにしたし
上にしたりして、合せた両手をしげしげと見
まわした。隣席の若い男の人は、不思議そう
に私を見ていた。多分「変な奴だ」と思つて
見ていたにちがいない。けれども私にとって
はあの母の合掌は何とも云えない重圧に感ぜ
られたから、自分の手を合せて合掌というこ
とを考えていたのである。その夏のお盆に帰

ったとき母に向つて「あの時手を合せていた
ね」と聞いたら「いいや」といい「あれはお
前を見送っているうち寒かったから口の息で
両手を暖ためていたのだよ」と云つて笑つて
いた。私は母が嘘をいっているのだと思つた
けれど、もう何も云わなかった。私はあれか
らあの母の手を合せた姿をけつして忘れたこ
とがない。あれから六年になるがその間の学
業にせよ何せよ根底にそれがあつた。もし私
に誰れかが「君の信仰について述べてみる」
といわれたなら、このことから話しを始める
ことと思つている。

今年の夏は何年来苦るしんだ、痔疾の手術
をしたのである。しかし一週間程して大量出
血が四回も続き血圧も五〇〇〇となつてしま
い、生死の空間を行ったり来たりしたのであ
る。雲光院の住職や寺院の方々に血液をもら
った。結局輸血は一二〇〇ccであつたけれ
ども一命をとりとめたのである。九月二日の
事である。人間というものは意識が朦朧とし
ていても生きたいと思うものだと思つて思
つた。何人かの人の血をもらい助けてもらつ
たことは、心の底から手を合せる、必然的に

合掌している自分の姿を自分自身大きなもの
に縛られるようにさへ思えた。しかし血液を
もらった人々に対するものではない。何か多
くの物に手を合せたくなつたのである。三週
間程して退院できた。医師に「もういいよ」
と一言いわれた時のあの気持、複雑な喜び
を得たのである。

父の葬式の時、むりやり手を合させられ
た時の気持と、あの母の合掌と、一命をとり
とめた時の合掌私には何回となく手を合せる
という事を切実に考えることがあつた。今秋
雨を庭にみつ手手を合せるということを考え
てみると、これが全く「被る生活」「被る人
生」と思えてならない。即ち生かされている
という事である。けつして私自身生きるの
ではなくして「おかげで」私は今まできた。
大きな力に左右されながら。しかし母のあの
合掌は私のこれからの進路にも大いに影響す
ることだけはまちがいない。生死のウツロな
あの合掌は阿弥陀様への感謝の心かも知れな
い。母の合掌は私には阿弥陀様へ帰依する念
仏かと思つている。

絵	連
話	続

みんなの法然さま

—その弟子たち—

高橋良和

さしえ 加藤直



粟生野に茶毘した法然上人の遺骨は、その後方々に分骨し

て弟子たちが上人を偲ぶよすかとした。

その一つが上人の縁りの地、知恩院の今の御廟の地に安置されたのである。

この頃各地に法然上人の弟子たちがしきりに切望していたので、そのなかには法蓮房信空、西仙房心寂、正信房湛空、播磨の信寂坊乗願房宗源、長楽寺隆寛、遊蓮房円空などが、上人の弘めた念仏のおしえを守りつたえたのである。

その一人に京都に勢観房源智という弟子があった。

これは上人の生前に一枚起請文の執筆を上人に願った人があるが、この人が上人の遺骨を守って、その後知恩院に任したのである。

もちろん、その頃は吉水の榊房であって、今日の知恩院の

伽藍など思いもよらなかったことである。

そこでこの勢観房源智は、上人の滅後加茂の神宮寺境内にひそかに住んでいたのである。

この神宮寺が今日の百万遍本山であるから勢観房源智は、この百万遍を山の第一世ということである。

然し勢観房源智は、先の嘉禄の法難にあったあと、七年間奮激の心をこらえて、上人を一人追慕していたが、やがて世のなかもおちついてきて、上人の遺骸をあばくような事件もいつしか人の心から去ってしまった頃であった。

もういいだろう、いつまでも遠慮する必要がない、吾が師法然上人のあとをなんとかしても守らなければならない。

このように決意して、あの吉水の榊房の地を復興しなければならぬということ、その造営を考えるのである。



それは法然上人が亡くなってから、二十三回忌のときであった。

幸にも知恩院の地は、その昔から甚大な地域であったし、清水、二つ岩、松下の三つの禅房があったので、その地に一大構想をすすめて建築がなされたのである。

この年は勢観房源智の五十二才のときであった。ここに知恩院の基礎が出来あがったのである。

このとき四条天皇はこの勢観房源智の功績をたたえ、法然上人の遺徳を偲ばれて、出来あがった仏殿に大谷寺、御廟に知恩教院、総門に華頂山という勅額を下賜されることになった。

京都東山の華頂山知恩院は、詳しくは、華頂山知恩教院大谷寺というのである。

このように今日の知恩院の基礎をつくったのが勢観房源智であるので、知恩院ではこの上人を第二代として、開基法然上人の次に名をつらねているのである。

そこで上人の弟子のことにについて、その法の上での流れを述べておく必要がある。

というのは、法然上人の門下に四大弟子といわれる立派な弟子があったのである。

その名を述べると、鎮西の聖光上人(しょうこう)、西山の

善慧（ぜんね）長楽寺の隆寛、九品寺の覚明（くほんじかくみょう）の四人である。

それらの人には、それぞれ上人のおしえのなかから自分の得たおしえをたてて、布教伝道していたのであるが、たまたま九州から上洛していた鎮西の聖光上人が、法然上人のおしえを充分体得したようであった。

というのは、聖光上人は九州きつての学僧であって、天台を学び、比叡山でも修行した人であった。その後油山の学頭という、今でいう芸の代表者となったが、たまたまさる寺の本尊を迎えるために京都にやってくるようになった。

はるかなる旅路を、京都の町に着いて、仏師康慶のもとに仮寓して、仏像の出来るのを待っているうちに、康慶からはなしを聞いたのである。

あなたも、わざわざ九州からこられたのなら、最近京都で道を弘める法然上人という方に会われたらどうでしょう。

いや、わたしもかねがね九州でその名を聞いていたが、その法然上人とからに一度だけ会ってみたいもの。

それなら吉水の庵室にお行きなされ。

こういうことから、さる日、聖光上人は、吉水の庵室に法然上人をたずねたのであった。

あなたが鎮西の聖光上人か。

ひと目みるなり、法然上人はこの聖光上人が未来の大器があることを知ったようである。

あなたのような方は、吾が念仏門では得がたい方である、どうか、鎮西でこのおしえを弘めてください。

それについては、上人のおしえの全般をおしえていただきますもの。

二人の心はしっかり結ばれたのである。

それで法然上人は、この聖光上人に、選択集（せんちやくしゅう）をあたえて、念仏門の興隆につくしてもらいたい、と強く要望したのである。はい承知しました。

それならあなたに、弁河という名をあげましょう。

ということ、この聖光上人はその名をいただいて九州の地にくだるのである。そして九州全地域に念仏のおしえを弘めることになるのであるが、この聖光上人のつたえる浄土宗のおしえと、勢観房源智か上人からおしえもらった浄土宗のおしえとはピッタリ一致することになって、ここに法然上人のおしえは一本のレールの上に乗ることになったのである。

それが今日浄土宗に大きな勢力をもたらしたのであって、

浄土宗の流れからすると、法然上人の次に二祖として鎮西上人をその系譜にのせているし、知恩院からすると第二代は勢観房源智上人となっているのは、こうしたわけである。

御年始のご挨拶がわりに御用を、

「修養ひめくり」

価 100 円・送料55円用紙33枚
タテ37cm・ヨコ13cm

会員のかたは単価85円 送料実費 (見本は150 円お送り下さい)

「浄土宝暦」

価 30円・送料 25円 40ページ

50部以上より単価25円 送料実費

発行所 法然上人仰会

本年も残りわずかとなり、会員の皆様にはお忙しい日々をお送りのことと存じます。

会員の方の中、新年の年賀広告を申込み下さる向きはお早や目に弊会まだだ連絡下さいませ。皆様方のお力ぞえをいただき益々本会の興隆を図りたく思います。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一カ年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 十一月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十二年十月二十五日 印刷

昭和四十二年十一月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式
会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人仰会

電話東京二六二五九四四番

横濱東京八二一八七番

大正大学教授
文 博

佐 藤 密 雄 著

新 刊 講 本 大 乘 戒

B 6 判 96 P
価 150 〒35

大乘諸經典に示された菩薩戒の要点を分りやすくまとめた好書
内 容

第一章 各種の菩薩戒（禁律と戒・十善業道・華嚴經の三聚淨戒・涅槃經の三聚淨戒・瑜伽・地持經の菩薩戒）

第二章 梵網經菩薩戒本の訳註（梵網經菩薩戒本の訳註梵網菩薩について・梵網經菩薩戒本の和訳と註）

発 行 所 大 道 社

大正大学教授
文 博 竹 中 信 常 著

日 本 人 と 仏 教

定 価 600円
〒 70円

日本人の宗教観を大きく高く展開させた法然上人の教えと
信仰を明示した本書は人間と念仏を復興させる巨大な灯
ある

教 育 新 潮 社 発 行

真 野 正 順 著

新 刊 日 本 人 の 信 仰 と 生 活

B 6 判 356 P
価 700 円 〒70 円

昭和のはじめの国家主義の嵐のなかにあつて真の日本人の在り方を示す
ため、仏教的ヒューマニズムをおすすめ、また戦後の混乱期において、
新しい日本人の精神生活に礎をあたえた筆者の、仏教者としての信仰と
人生観のあふれる遺稿のかずかずをまとめた珠玉の随想録

内 容

第1章 香を焚く 第2章 生活を強く美しく
第3章 先聖行ける道 附 真野先生を偲びて

発 行 所 法 然 上 人 鑽 仰 会

東京都千代田区飯田橋 1-11-6 振替東京 82187